

注目すべき点は、その作業所はわずかな公的助成は受けているものの、障害者総合支援法の障害福祉サービスの制度を利用せず、自力で運営されている点です。

杉浦氏自身、お話の中で作業所に通う様々な課題を持った人たちを「利用者」とは決して呼ばず、あくまでも一緒に働く「メンバー」と呼ばれていました。

作業所が地域の中でしっかりと存在している意義を持ち、地域の方々に必要な活動を通して市民の方々とお互いに支えながら活動していく。そして、福祉の世界での支援する側、される側といった枠をつくらずスタッフとメンバーが同じ立場で働けるそんな作業所の話がありました。

2人目のシンポジストの石川氏は、杉浦氏とは対照的に、障害者総合支援法に基づき就労系、居住系、介護系と多方面に事業を展開されており地域における自立生活を全面的に支援されていました。その中でも在宅での就労移行支援についてお話してくださり、当初は外出すらできなかったアスペルガー症候群の男性が、職員の繰り返しの訪問から信頼関係ができ、本人の気持ちの変化やその人にあつた働く環境を整えていくことで就労に至った事例を詳しく説明がありました。

地域の方々の理解や協力、信頼関係の構築、環境の整理、どれも容易にできることではありませんが、それらを作り上げ障がいのある方が地域の中で自分の働く場を見つけ、当たり前で働けるそんな社会を実現させているすばらしいお話しでした。

第16回 全国障害者スポーツ大会「希望郷いわて大会」が開催されました

大阪市西部地域障がい者就業・生活支援センター
管理者 平松 朝啓

9月22日から24日の3日間、岩手県にて第16回全国障害者スポーツ大会『2016希望郷いわて大会』が開催されました。

前日の21日には、6時間ほど新幹線に揺られ到着した先は、最低気温が3度と吐く息も白くなる盛岡の街でした。到着すると息をつく間もなく公式練習でコンディショニングを確かめ、宿舎でようやくホッとしたときには、星が瞬いていました。

大会初日は5時半に起床し開会式へ。皇太子さまのお言葉を賜り、地元の支援学校などから歓迎のセレモニーを受け、大会が始まりました。

個人的には2年ぶり2度目の参加でしたが、前回派遣された時と違ったのは、近い点数を出す選手同士が同じレーンでの組み合わせになり、緊張感の高い試

合となったことでした。皆これまでにない高いプレッシャーと戦うこととなり、それぞれに得るものがあった大会となりました。そのような状況の中でも大阪市のボウリングチームは好成績を納められ、東成育成園の中島 千佳さんの金メダルはじめ、数名が見事メダルを持ち帰ることができました。



他の選手たちも、普段以上の力を発揮した方や課題を見つけた方などそれぞれおられました。2つ気になったことがありました。

1つ目は、コーチについてです。他の都道府県の選手団では、ボウリング専門家がコーチとして帯同しているチームが多くありました。練習でのコーチの指導助言により、大会でコンディショニングを上げた選手もいました。大会中の移動や生活面にかかる活動のサポートはさせていただきましたが、競技に関しては、なかなか力になれなかった事が心残りでした。レーンの特徴の把握やプレッシャーを受けた選手へのアドバイスなどが必要な場面で、一辺倒な応援の言葉しか出せない力不足を感じて止みませんでした。

2点目は、以前は大会に向かうための携行品の確認といった準備等が、保護者の高齢化等の理由により少しずつ難しくなっている方がおられたことです。今後、単身で準備が難しい方の支援をどのように所属元や地域と連携していくかといった事が課題となってきています。無事帰阪してメダルがいくつ取れたという事も大切ですが、見つかった暮らし辛さをどのようにして安心に結びつけ、次に参加するための準備や手続きを滞りなく進められるか・・・といったサポートの繋ぎも、日常に戻っていく彼や彼女たちを見送る側に求められる視点ではないかと感じました。

